

# ワークライフインテグレーションの時代へ



## 竹下卓志

(株)コーセー研究所  
[114-0005] 東京都北区栄町 48-18  
専門は高分子合成, 有機金属化学, 化粧品学.  
t-takeshita@kose.co.jp  
<https://maison.kose.co.jp/>

このようなライフキャリアに関する執筆の依頼を、私のような若輩者が受けてもいいのかという迷いはあったが、大学卒業後に研究職として企業に就職し、30歳を超え中堅層となった企業研究員のリアルな現状を伝えられればと思い、お受けさせていただいた。

私はシリコン合成触媒に関する研究で修士号を取得し、その後現在の企業へと就職した。学生時代は、サークルとバイトをこなしつつ、テストは直前の過去問反復で乗り切る量産型の大学生であったように思う。研究室配属後、自分でも意外であったが、研究に対して面白さを見いだして熱中し、研究室に入り浸り、遅くまで実験を行っていた。ただ当時、企業に就職したらまったく違う研究をするのに、プライベートの時間を割いてまで、学生研究にのめり込むのは何だか勿体ない気持ちもあった。その実、学生時代の研究内容が、企業研究と完全にマッチすることは少ない。しかし学生の皆さんには、学生時代の研究を疎かにしてはならないと伝えたい。なぜなら、研究に対する姿勢や情熱、実験で課題に直面したときに、論文を読み漁って解決策を模索する情報収集力など、企業の研究を進めるうえで求められる力と何ら変わりはないからだ。企業に就職してその力を身に着けるよりも、学生時代に身に着けていたほうが、キャリアを考えると圧倒的に有利である。

大学卒業を境に福岡から上京し、すでに7年経とうとしている。入社してからは、上司を始めとする周囲からのサポートもあり、海外での製品試作やIFSCCという化粧品業界最大規模の国際学会でも口頭発表するなど、さまざまな業務を経験させていただいた。プライベートでも入社4年目に結婚をし、この先、家を買って、子供を2人ほど設けて、家事育児を“ある程度”サポートしつつも仕事に注力していく、そんなライフキャリアを歩んでいくと思っていた。

しかしここで大きな転機が訪れる。それは双子の娘の誕生である。家事育児の“ある程度”のサポートでは、到底家庭が回らなくなった。私と妻の両親は、いずれも遠方に住んでおり、親のサポートを頼ることはできない状況であったため、産後1カ月間は育児休暇を取

得した。育休中は常に大人2人体制のため、大変ではあったが充実した毎日を過ごせていた。育休期間中に学んだことは、「双子のワンオペは熾烈を極める」ということだ。その学びを活かし、仕事復帰後、私が仕事をする日中にはワンオペで多大な負荷をかけている分、業務後には、寝かしつけや家事全般を担当したが、うまくいかなかった。なぜなら、業務後にいくら家事育児をサポートしてもなお、日中の双子育児のほうが、負担がはるかに大きいからである。加えて、業務後に家事育児のサポートを重点的に行うと、寝不足によって業務効率が低下することで、負のスパイラルに陥っていたように思う。仕事復帰してしばらくは1日乗り越えるのがやっとで、あまり記憶もない。

その当時、私はワークライフバランスをうまくとらなければと、仕事と私事を切り離して考えていた。その考え方こそが最大の失敗の要因だったように思う。スーパーフレックス制度を導入する企業も増え、また在宅勤務を活用できる今の時代、私は「仕事」と「私事」は、柔軟に高い次元で統合するべきだと考える。あくまで一例だが、私はスーパーフレックス制度を活用し、朝に洗濯・離乳食・食器洗いを行い研究所へ出社、研究所でなければできない実験を夕方まで実施し帰宅、在宅勤務をスタートさせながらも、業務中抜けとして入浴・離乳食・寝かしつけをそれぞれ対応しつつ、データ整理、論文や特許などの執筆活動を行っている。このように仕事と私事を融合させた働き方へと切り替えた。もちろんすべてが楽になる訳ではなく、その中で選択と集中を図らなければならないが、明らかに仕事と育児の効率が向上したように思われる。

私のケースは双子育児であるが、不妊治療や心の病などプライベートにはさまざまな事情がある。私も子供が保育園に通い出すと働き方も変わるだろう。仕事と私事の付き合い方は人それぞれである。私は会社に今の自分の働き方を受け入れられる制度があり、またそれを認めていただける上司や同僚に感謝し、今後もワークライフインテグレーションを目指していきたい。そして誰も取り残さない働き方の多様性が社会全体に広がって欲しいと願っている。